

平成25年1月定例観察会報告書



六甲山自然案内人の会

実施日：平成25年1月13日（日）

コース：神戸薬科大～権現谷東尾根～魚屋道出会～魚屋道西尾根～甲南女子大

テーマ：甲南山手の陽だまりを歩く（3班担当）

参加人員：ビジター33名、会員31名、合計64名

当日の配付資料：コース地図、植生リスト

【概要】

数日前までの寒気も緩み、しかも風もなく、まさにテーマである「陽だまりを歩く」にふさわしい日和となった。連休の中日にもかかわらず64名の参加（当方の予想以上）。正月太りをこの観察会で解消しようという狙いがあったかもしれない。住宅地を抜け、神戸薬科大学から上りの山道へ、そして魚屋道出会から尾根筋を下って甲南女子大に向かうコースであるが、企業などによる森を守る活動を見聞き、冬の植物観察の定番である冬芽や植物に依存する虫たちの生き様（虫こぶ）などを観察することができた。

【観察記】

1. 阪急岡本駅から神戸薬科大学まで

岡本小学校のフェンス越しにギンバイカ。地中海地方原産の植物。花は白色、長く多数あるおしべが特徴的。花嫁のブーケに使われる。校門近くに植栽されていたシクラメン、これも地中海地方原産、別名を「ブタの饅頭」という。この由来は英名 **sow bread** を和訳したもの（**sow** は雌豚の意味）。

中野八幡神社の参道に入ると間もなく愛子内親王の記念樹の碑。お印はシロヤシオのはずだがそれらしいものはない。階段途中にアリドオシ。「千両、万両、有り通し」として、生け花では縁起のいい植物。どこからともなくテイカカズラの綿実がふわふわ。住宅地側から神社の植物を眺めると、ビナンカズラの赤い実、イヌビワの実、アオキの実、ネズミモチの黒い実。ビナンカズラはキベリハムシという六甲山にしかいないハムシ（葉っぱを食べる虫）のエサとなる植物。明治時代の初期、貿易の始まりと共に物資に混じって中国から侵入。

神戸薬科大学では植物園と温室併せて約800種の薬用植物を栽培。土日を除いて見学可。漢方薬は医師の診断により、複数の生薬を調合したもの。風の初期症状に効くといわれている「葛根湯」は、クズの根の他6種の生薬（合計7種）を調合したもの。漢方という呼び名は、江戸時代に入ってきたオランダ医学（蘭方）に対するもの。

2. 神戸薬科大学から魚屋道出会まで

ここからは山道のり。幹の直径50～60cmほどに育ったアラカシ、クヌギ、アベマキ、ムクノキ、エノキ、カゴノキ等が目につく。息を切らして登ると、UCC コーヒーが森を守る活動している広場に到着。森を守る活動とは、ネザサ刈り、優勢な常緑樹などの伐採を通じて広葉樹の成長を促す一方、コナラ、モミジ、ツツジ類などの栽植を通じ、森林全体の植生を豊かにすること。本日のコースには同様の活動をしている場所が6か所ある。

説明を受けたのち、桜並木の山道を登る。途中左手が所々伐採され、神戸港が展望できる。観察できた主な常緑樹は次のとおり：チャ、シロダモ、ヤブニッケイ、クスノキ、カゴノキ、ヤブツバキ、ヒサカキ、マサキ、ムベ、ナワシログミなど。落葉樹：アベマキ、クヌギ、コナラ、ヤマコウバシ、カラスザンショウ、ヤマウルシ、ヤマハゼなど。

神戸港を展望できる場所で小休憩後、No.53の東京海上火災日動の活動場所で昼食。昼食後、富井講師による冬の植物の観察の仕方、冬芽の形態のいろいろについて、自作の絵をもとに解説。



3. 魚屋道出会から甲南女子大まで

ここからはひたすら下りが続く。花崗岩が風化した真砂や落ち葉に注意して、滑らないように気を付ける。冬になっても茶色の葉が落葉しないヤマコウバシが目につく。受験生の守り神だ。この尾根筋は、上ってきたところと違い、ツツジの仲間のアセビ、モチツツジ、ネジキなどが多い。酸性土壌がその所以か。イヌツゲとソヨゴには、タマバエが作った虫こぶがあった。ヤブニッケイとクスノキには、キジラミが作った虫こぶがあった。

パナソニックの活動拠点ではヤマナラシ。樹皮はひし形の模様が点在。落葉している葉で、葉柄が扁平であることを観察。モチツツジには花が枯れた痕があった（12月月の下見時には何輪か狂い咲きしていた名残）。ツツジの蕾がネバネバしているのは、花が咲く前

に蜜をとられないため。花が咲いた後に虫が来る場合は、花粉媒介の役を担ってもらえるので花にとって有益であるが、花の咲く前に蜜をとられてしまえば、花が咲かず種子を残すことができない。植物側の昆虫に対する抵抗措置だ。

さらに下っていくと、ヤマモモの大木が目につく。その他、シャシャンボはじめ、いつもの常緑樹。甲南女子大まで下ると水路があり、ヤブソテツの仲間、イノモトソウの仲間など、シダ植物が水路の石垣に自生している。最後にヨモギの虫こぶの解説。タマバエ、ミバエ、アブラムシなど虫の種類によって形の異なる虫こぶがヨモギで見られる。ヨモギは多種の虫のエサとして重要な植物。春には人間によって新芽を摘まれ、散歩のイヌにおしっこをかけられ、虫に食べられるなど、ヨモギにとっては苦難が続くが、根があれば大丈夫。蛇足ながら、沖縄ではヤギ汁を食べるときに、臭い消しのためにヨモギを使う。このためヨモギの畑がある。

【後記】

今回は、一般の方33名の参加を得て、25年度開幕の観察会として盛況な会となった。お話を伺うと、「歩いたことのないコースだったから参加した」（男性）と言う声が多かった。また、「解散時間が早く参加しやすかった」（女性）（当初予定では2時解散）という声もあった。12日の総会において、一般参加の方をいかに増やしていくかが課題であることが話題となったが、観察コースの選定、そして興味を引き付けるためのチラシの見出しの工夫が解決の一助となることが示唆された。

33名の参加者を得たにもかかわらず、順次解散としてしまったので、エキスパート講座の宣伝ができない班があった。事前の連携がうまくいっていなかったことは反省材料としたい。三宮に戻って11名で反省会をしたが、同席していた演劇グループに定例観察会やエキスパート講座の宣伝できたこと、お店にチラシを置かせていただいたこと、思わぬ宣伝活動ができたことは救いとしたい。